
ゆらゆら

かつお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆらゆら

【Nコード】

N9705G

【作者名】

かつお

【あらすじ】

大切な幼馴染の女の子を傷つけない。そのために宏は結花との関係を幼馴染から恋人へと変える。だけど、それは間違いだったと気付いたときは既に戻れないところまで進んでしまっていた。

ただ、笑っている顔が好きで、泣いている顔が嫌いで、だから、いつもこいつには笑っていて欲しかった。そんな、笑顔をずっとそばで見たいられると思っていたし、見ていきたいと思ってた。でも、そんな思いも崩れていく。トランプタワーのようにわずかなバランスの配分のミスで崩れていく。一枚の揺れは全部の終わりを示している……

1

俺とゆ結花が付き合ったのは、ほんの数ヶ月前のことだった。ガキの頃から近所だったこともあって俺と結花はしょっちゅう顔をあわせるのが日課と言っているほどだ。

それが高校二年生となった今でも続いている。そして、今は幼馴染としてではなく、恋人として……。

とは、言っても別段何かが変わったというわけでもない。相変わらず、朝、肩を並べて学校行つて、週の何回かは一緒に飯食つて……そんな感じ。

付き合った日のことはよく覚えている。あるとき、ふと、結花が顔を真つ赤にしながら俺のところに来た。まあ、こいつは昔から控えめで大人しくて、すぐ照れて、そんな奴だから顔を真つ赤にしてきてもどうってことないことなんだろうと思っていた。

「……ひ、ひろ宏ちゃん、あ、あのね……、こ、これ、下駄箱に入つて……」

まあ、いわゆるラブレターってやつだった。内容も別段、捻りもない恋文。放課後、屋上に来てくださいと、最後に名前と一緒に書いてある

「へえ、よかったじゃん、がんばれよ」

「で、でも……いいのかな」

「おまえがいいんだから手紙をくれたんだろ？」

「う、うん・・・」

その日の放課後、俺は暇つぶしに図書室で本を読み、空が薄暗く夕焼ける頃に鞆を片手に下駄箱を出た。夏の終わりの九月の後半の夕方はほどよい涼風が流れていて、心地よかった。

本を読んで凝り固まった肩を伸びをしてから、軽く回しほぐしながら家路に着く。ふと、見慣れた姿に俺は軽く手をあげて声をかける。

「よ、結花！彼氏待ちか？」

どこか困ったような感じで結花はえへへと笑う。こいつが俺に隠し事するときの癖だ。

「・・・どした？」

「な、なにが？」

「隠し事があるんだろ？」

ぶんぶんつと頬を横に振る。結花は昔からそうだった。心配かけまいとして自分で溜め込んでその溜め込んだ重みで傷ついていく、そんな子だ。だから、無理にでも聞かないといけない。

俺の真剣な瞳が結花の瞳と交わる。

なんでもないことでも話すかのようにこいつは一生懸命の笑顔で俺に話した。

「・・・間違いだって、ゆり由梨さんの下駄箱と間違えたって・・・笑われちゃった。そうだよねえ、私なんかね・・・えへへ」

由梨さんか・・・。どの学校でも必ず一人はいる。憧れの高嶺の花といった人だ。同じクラスにながらにして、距離は地上と月といったぐらいに離れている。さらつとしたロングヘアーに抜群のスタイル、頭もよければ顔もいい。おまけに人当たりもいいという三拍子そろった子だ。

そういえば、俺も同じクラスになった最初の時に密かに憧れていた。付き合えたらすごいなあってな具合に。でも、まあ、アイドルは偶像であって、偶像相手にはどうしようもなく俺もすぐに熱が冷

めたわけだった。

それはともかくとして、笑うとかどうかと思うけど、まあ、向こうとしては悪気があったわけじゃないだろう。やっぱり、告白する場所に違う人がきたら、普通に謝るか、笑って軽く謝るかするだろう。

結花ももう少し明るければ由梨さんまではいかなくともモテると思っただけ……。

「あんま気にするな。向こうも由梨さんが来ると思ってたら、結花が来てびつくりして、肩すかし食っただけだと思うよ。別にお前が告られる程かわいくないだなんて誰も思ってないよ」

「う、うん。ありがとう……え、ええっと……」

何か言い出せずにもじもじとする結花。ただ単に照れているってわけではなさそうだ。

「どした？」

「……宏ちゃん、私って、か、かわいいかな？」

「ん？一般的にそこそこのいい線いつてるんじゃないのか？」

「……そ、そうじゃなくて、宏ちゃんは私みたいな女の子、好きなかなって思っ……」

さすがにここまで言われたら鈍い俺だって分かる……っていうか、あまりこいつのこと恋愛的視点で考えたことがなかったから、急にそう言われても難しい。

「……」

なかなか、気の利いた言葉が思いつかない。このまま、黙っているわけにもいかない。そんなことしたら、ただでさえ少し落ち込み気味のこいつが、俺のせいでもっと落ち込んでしまいそう。ここで俺が好きって言わなきゃ、今までの俺のはげましは無駄になってしまう。友達として好きって言うのは駄目だ。こいつの女の子の部分を否定することになってしまう。

「ご、ごめんね……。私、変なこと聞いちゃった……」

えへへと照れ笑いする結花。そんな結花を俺は手で制止、

「変なことじゃないよ。確かにちよつとはびつくりしたけどな、俺は結花のこと好きだぞ。結花と俺が付き合ったら誰もが羨むナイスカップルだ」

悪戯っぽく笑って結花の方を見ると恥ずかしそうに頬を赤らめていた。耳たぶまで赤くなり始めている。この瞬間から俺と結花は恋人になっていた。

本当は恋愛対象として見れていない。だけど、なんだか結花がへこんでいる姿を見なくなかった。それに付き合う＝結婚するってわけでもないし、そんなに深く考える必要もないだろう。付き合っただけ好きになればそれでいいし、なれなければ傷つかずに別れればいい。

「じゃあ、さっそく、手でもつないでラブラブしながら帰ろうか」

「う、うん。私達、恋人同士だよな？」

少しだけ不安そうに結花が尋ねる。

「もちろん」

俺は結花の手を少しだけ小さくて柔らかい手握りながら頷く。結花はうれしそうに微笑んだ。顔は先ほどからずっと変わらず真っ赤だった。

そんなわけで、この日からちっこくて、ショートカットの照れ屋な幼馴染は一転して恋人になった。

2

十二月の二十四日は町に無数のイルミネーションとジングルベルのメロディーでいっぱいになる。家族やら友達、恋人達はそんな中を楽しそうに肩を並べて歩いている。そういった空間の中、俺と結花はというと・・・

「今日のデートは中止だ・・・」

俺の一言に抗議しようとする結花が口を開く前に俺は言葉を続ける。

「そんだけ熱があつたらせつかくのデートも楽しめないだろ？だから

ら、今日は帰ってゆつくり休め。デートはいつでもできるだろ?」

「で、でも、せっかく、宏ちゃんが時間を空けてくれたのに・・・」

「俺のことは気にするな。ほら、家まで送るから帰るぞ」

「ご、ごめんね」

「結花が悪いんじゃないんだから、あやまるなっつーの。ほら、行くぞ」

「う、うん」

俺は結花をバス停まで連れて行く。

バスが来るまであと五分くらいだ。

特に会話もなく、クリスマスソングや通り行く人たちの楽しそうなざわめきだけが場に流れる。

「宏ちゃんここまででいいよ。あんまり一緒にいると宏ちゃんにも風邪うつっちゃうから・・・」

「ばーか、中学校時代、皆勤賞を獲得した俺をなめんなよ?」

力瘤を見せて軽く笑う。

「で、でも・・・」

「まあ、仮にうつたとしても結花の風邪なら全然オツケー・・・なーんで、くさいセリフを吐いてみたりしてな」

そんな会話をしているうちにバスが到着する。

「ここまででいいよ」

バスの入り口で軽く振り向いて、顔を真っ赤にした結花が言う。
熱が上がってるんじゃないだろうか・・・。

「俺も行くよ」

ふっと、結花が俺に近づいて、ほんの少しだけ躊躇ったあと、背伸びしてそっと俺の唇にキスをした。柔らかな感触がバスの中へ離れていく。

「風邪・・・うつたらごめんね」

顔を真っ赤にした結花が俯きながら俺の表情を上目遣いでみている。

「ぜんぜんオツケーって言うただろ?ってというか、俺も乗らないと・

・ ・ ・

「だめだよ。せっかくなんだから宏ちゃんは少し遊んできて」

「いや、俺だけ遊んでもな」

「私は大丈夫だから」

どうしたものか・ ・ ・。そうだな、遊んできた方が結花はあまり気負いしないかもしれない。ここで、家まで送っても結花のことだから逆に気にしてしまうだろう。あまり気を遣いすぎるのもよくない。

「そんじゃあ、少し遊んでから帰るよ。お土産期待しとけよ」

「うん・ ・ ・」

バスの戸が閉まる。バスの姿が見えなくなるまで見送った後、俺はクリスマスで賑わう町へ身を投じようとしたとき、

「メリークリスマス、宏志君」

ふと、声をかけられる。声をかけてきたのは由梨さんだった。同じクラスとはいえ話をするとはめったになかった。まあ、アイドル的な存在ということもあって話しかけづらいんだけどな・ ・ ・。

「メリークリスマス、由梨さん」

あんまり緊張とかしない方なんだけど、今回ばかりはさすがに少しドキドキしてしまう。照れているのを見透かされるのは恥ずかしいので軽口を叩いてみる。

「由梨さんは彼女待ちなのかな？」

「あはは・ ・ ・、一人だよ。っていうか、私はそっち系の人じゃないよ。ちよつと、クリスマス気分には酔おうかと思って町に出てみたんだけど、やっぱり、一人で歩いている人って、あんまりいないみたいだねー」

かなり意外だった。これだけかわいければ彼氏の一人や二人くらいつくれそうなもんなんだけどな・ ・ ・まあ、二人とかつくる奴の気が知れないけどな。

「俺もとりあえずクリスマス気分浸ってこうかなって思ってた」

「それじゃ、暇人同士、親睦でも深め合いましょうか？」

「そうしますか」

とりあえず、この町の娯楽施設の密集した場所へ行く。最初はカラオケから攻めた。

「宏志君、勝負する？」

勝負か……。俺はニヤツと笑いながら

「マジで？俺は強いぞ」

カラオケ。俺と言っても過言ではない。人に聞かせるのは上の下くらいだけど、点数を出すことに關しては天才的だ。俺は高得点シンガーとして名高いのだ。

「私だつて負けないよ。宏志君から歌つていいよ」

「じゃあ、まずは適当なのからつと……」

先手で歌う場合は一番得意な歌で攻めるのがベストだ。序盤からの高得点は相手へプレッシャーを与えることができる。俺は裏声を駆使しつつ完璧なリズムと声量で歌いきる。画面がチカチカ光り、点数が現れる……。98点。まあまあこんなところだ。だいたい、カラオケボックスの点数つてのは歌手が、自分の歌を歌つても100点などはそうそうでないくらいだ。そういうわけだから98点はなかなかのもんだろう。

「じゃ、私、歌うねー」

由梨さんが選んだのは最近、チョコレートで流れていたラブバラードだった。甘くどこか苦いというフレーズに合った曲だったけな。由梨さんが歌い始める……。

点数は……。100点だった。まさに格の違いを見せつけられた感じた。だが、そんなことよりも声がすごくきれいだった。すごく透る声でよく響く声。歌詞に感情が籠つていて、聞く人へと伝わるような耳だけでなく心にも透る歌い方だった。思わず余韻でボーとしてしまった。

「どうだった？」

「やべえくらいにうめえな。正直言つて、まいったよ」

「そこまで言われるとなんかすごく照れるんだけど……」

ほんのりと頬を染めながら照れる姿は普段あまりみないため、なんだか新鮮だ。

「そだ、これ、一緒に歌おうよ」

「いいよ」

妙に息が投合した俺と由梨さんは日が暮れるまで遊んだ。

なんていうか不思議だった。遠くにいたはずの存在が近くにいて、それで遠くにいたときには見えなかったものが見えるようになって、驚きやら新鮮味やらがいつぱいだった。

気がつけば、今日、最初に会ったときの緊張感はなくなっていた。クリスマス気分には酔わされていたつてのもあるかもしれないけど、意外と気が合つて、なんだか遠慮なくしゃべれて、昔抱いていた憧れはなくなつたけど、それで失望とかはしなくて、逆に新しい発見みたいなものがあつた。

「由梨さん、今日は楽しかったよ」

「ちよつと、待つてよ。親睦を深めた仲でさん付けはないでしょ」
めっ、と子供を嗜める様な仕草をする。

「じゃあ、なんて呼ぼう？」

「呼び捨てでいいよ。宏君」

「まあ、俺も宏君でいいや」

そんなこんなで俺は憧れてた由梨さん・・・由梨とほんの少しだけ仲良くなつたのだった。由梨と別れた後、俺は結花へとお土産を買つていった。結花の家に行くといつの両親が出てきて、既に眠つていると言つたのでプレゼントを枕元に置いてもらうことにして家に帰った。こうして、今年のクリスマスイヴは幕を閉じていった。

3

年も明けて、再び学校も新学期を向かえる。俺と結花はというと相変わらずな感じ。由梨とはなんだか前と比べて学校でも話をするようになつたくらいで、別段何かが変わるようなこともなくゆるやかな時間が流れていた。

そして、そんな柔らかな時間が、ずっと続くと思っていた……。授業も終わって、放課後になる。ふと、携帯電話がブルブルと震えていることに気づく。どうやら、メールが届いたようだった。宛名を見ると由梨だった。新学期が始まってから、しばらくして番号交換して、たまにメールなんかを送りあっていた。まあ、そのメールの大半は学校の行事やら宿題やらのことだった。だけど、今回はそういった類のものではなかった。

『今から会えない？』

というものだ。待ち合わせ場所は正門を出たところから少し歩いた小さな公園だ。滑り台と鉄棒と砂場しかない、そんな子供もあまりこないようなちっぽけな公園。天気はやや曇っていて、普段より少し寒い。俺はブレザーの下にセーターを着込み、結花には一言用事があると言って、公園に向かった。

今から行くというメールを送ってから五分くらいしただろうか。

公園にはすでに由梨が待っていた。ただ、いつもとは少し様子が違った。緊張しているような不安そうなそんな感じ。

「あ、ごめんな。待たせちゃったかな」

「うっん、そんなことないよ」

そこから会話が止まってしまふ。何か言いたいのに言い出せない由梨。急かして聞いていいものか悪いものかと考えて口を開けない俺。ふと、由梨が口を開く。

「私ね……。今からすっごい最低なこと言うと思う。私……」

言い出せないまま由梨が泣いてしまふ。由梨が言いたいことは分かるし、言ってしまったてからの不安も分かる。

「落ち着いて話して、どんなこと言っても俺は由梨のことを嫌いになつたり避けたりしないから、大丈夫だよ」

その言葉に少しだけ安心したのかゆっくりと掠れそうな声で話した。

「私ね……。今まで恋愛してたことがなかった。だって、来る人みんながどこか一線を引いてるみたいで、どこかよそよそしい感じ

がして・・・、ほとんどの男の子がみんなそうで・・・でも、宏君だけは違った」

そこまで話してから由梨は少し躊躇う。そして、泣きながら話し出す。

「私・・・宏君に彼女いるって知ってたのに・・・好きになっちゃって、本当は・・・この気持ちを隠さなきゃいけないって分かってるはずなのに・・・、友達でいなきゃいけないのに・・・でも、友達じゃ嫌だよ・・・」

なんて言っていていいか分からなかった。俺には結花がいるから断らなきゃならない。断る義務がある。でも、きつと、俺は心のどこかでこうなることを望んでいたのかもしれない。

俺の言葉を待たずして

「私は・・・絶対・・・諦めるから、がんばるから・・・友達でいて」ポロポロと涙を零しながら、由梨は俺に背を向けて駆け出していた。

これは全て俺の責任だ。彼女がいるのに、他の女の子と仲良くしすぎた俺の軽率な行動が招いたもの。結花の告白に同情で答えたのは別にまだ許される範囲だろう。だけど、同情で答えるっていう、軽い気持ちでずつと引きずるのは良くない。俺は心のどこかで結花を軽く扱っていたんだ・・・。

罪悪感に苛まれながらも、俺の心は揺れていた。憧れていた女の子、遠かった女の子、それが俺のことを好きって言ってくれた。結局俺は由梨を追いかけることができなかった。

それから、俺は馬鹿みたいに立ち尽くし、二人のことを考える。俺はどうなんだろう。由梨という時と結花という時、どっちが大切なんだろうか・・・。本当はこんなことを考えちゃいけない、俺には結花がいるんだから・・・。

4

「ええつと、きよ、今日はお弁当作ってみたよ」

かわいらしい包みが二つ俺の目の前にちょこんと置かれる。照れながら結花が俺の目の前に座る。あの日から一週間が経っていた。俺はどこかの空でこの一週間を過ごしていた。今日はあいにくの雨のため、教室で席を合わせて、俺と結花が弁当を食う。周りの視線がどこか色を帯びている。何気なく見た中に由梨がいた。どうにも気になって仕方がない。あれから由梨とは口を聞いていない。

「・・・ど、どお？お弁当ってあんまり作ったことないから・・・」
正直食べていても味が分からなかった。でも、結花は昔から手先が器用な筈だから、まずいなんてことはないだろう。

「うん、おいしいよ」

このままじゃいけないことは分かってる。でも、どうしたらいいのかが分からない。

「宏ちゃん・・・ご飯粒がついてるよ」

ひょいっとな俺の口元についている米粒を取って、結花が口に運ぶ。周りの視線がさらに色を帯びる。

ガラガラっとなにに教室の戸が開いて誰かが出て行く。由梨だった・・・俺はたまたま、教室を出る。廊下に出ると由梨は小走りにどこかへ行ってしまった。その後を追う、旧校舎まで走ってからようやく追いつくことができた。

追いかけたものの、なんて言っているのか分からなかった。まさか、結花といてごめん、なんて言えない。なんで俺は追いかけたんだろう・・・。

「なんで・・・追いかけてきたの・・・」

ふと、ようやくしほりだしたような小さな声で由梨が口を開いた。そして、その問いに俺は答えられない。自分でも分からなかった。放っておけなかったからか？友達だから？俺は結局、また、結花と同じように由梨にも同情しているだけなんじゃないのか・・・。

「・・・だめだよ。私、忘れられないよ・・・」

俺の胸に顔をうずめながら感極まったのか泣き出してしまふ。すごく胸が痛かった。ただ、その痛みは結花に対する罪悪感よりも由

梨を泣かしてしまったことに対することの方が強かった。

だから、俺はいけないと分かっているけど、恋人が、結花がいると分かっているけど、由梨のことを突き放すことができずに抱きしめてしまった。

結局のところ、俺は由梨にここまで言わせてからようやく、自分の気持ちに気づくことができたんだ……。

ずっと、届かないと思っていた。でも、彼女から俺の方へと来てくれた。むしのいい話だ。届かないと思っていた頃はすぐに諦めて……。そして、結局は近場の結花を選んでしまった。それも、軽い気持ちで……。

付き合う＝結婚じゃない。だけど、付き合う＝真剣は絶対だった。結花と俺は幼馴染の枠から出られなかった。いや、俺は付き合ってからその枠から出ようとしなかったんだ。俺はあいつと恋愛ができなかったんじゃない、しなかったんだ……。

由梨が顔を上げて俺の顔を見ている。目は赤くまだ涙で濡れている。どうしたらいいか分からないといった表情……。俺からゆくりと離れようとするが俺は由梨をまた抱きしめて、

「俺……、由梨が好きだ」

「でも……駄目だよ。宏君には……」

「ちゃんと終わらせるから……」

「駄目……だよ……」

由梨の言葉を塞ぐように唇を重ねる。由梨は抵抗しない。柔らかい感触と結花とはまた違った女の子のいい匂いがした。

胸が再びチクンと痛んだ。今度の痛みは自分自身を責める痛みと結花に対する罪悪感からくるものだった。

5

星が一つ、二つと、少しずつ輝き始める頃、俺と結花は肩を並べて歩いていた。恋人としての最後の下校。俺はなかなか結花に別れを告げられずにいた。胸が締め付けられるように苦しい。結花の泣

き顔が嫌いな俺が結花を泣かせようとしている……。でも、終わりにしなきゃいけない。

「なあ、結花、俺達さ……」

「……お願いだから言わないで……」

涙目で俺を見る結花。胸が痛む……。

「……私、宏ちゃんが好きになるような女の子になるから……、由梨さんみたいな子になるから、だから、ずっと、私の隣に……いてよお……」

話しながら結花は泣いていた。

「ごめん……」

俺にはそれしか言えなかった。最近、弁当を作り始めたり、どこか積極的だったのはもしかしたら、俺が由梨のことが好きだということに気づいていたからなのかもしれない。

「……ああああ……うえええん……」

結花は子供みたいに泣き出していた。でも、俺はもう頭を撫でてやることも、優しい言葉をかけてやることも、そして、となりにいてやることもできない。

「……ごめん」

最後に一言だけそう言つて、結花の泣き声を背に受けながら俺はその場を後にした。結花の泣き声が胸にずっと響いていた……。

＊

今、俺のとなりにいるのは由梨で、俺達は恋人同士だ。愛しくて守りたくて、俺にとって大切な人……。由梨と過ごす毎日はすごく楽しくて、大切な時間で、となりを見れば笑顔の由梨がいてくれて、すごく幸せだ。

……。だけど、ときおり、あの時から笑顔を失ってしまった結花の顔が目に入り、胸が痛む。

・・・あの時、俺が結花に告白されたときにもっと真剣に考えていれば、何かが変わったのかもしれない。あのクリスマスの夜、由梨と出会わなければ、結花は今も笑顔を絶やさずにいたかもしれない。

それでも、過ぎ去った時間はどうにもならない。偽善と分かっている俺は祈る。これから過ぎて行く時間が結花にとって、幸せなものであるように・・・と。虚ろとなった瞳に光が宿りますようにと・・・。そんな願いも結局のところは自己満足で、自分の罪悪感を埋めたいだけのもので、今の俺は由梨に寄りかかって、由梨で結花を遮って生きている・・・。

— f i n —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9705g/>

ゆらゆら

2010年10月8日15時45分発行